

## 7 障害のある子どもに対する「授業」における教員の気づき

～何を大切にしたらよいか～

### 1. はじめに

Aさんは、「脳性まひ」のため四肢や体幹に機能障害がある。移動は介助用の車いすを使っている。上肢・下肢に不随意運動があるが、パソコンのキーボードを押すことはゆっくりであるが可能である。ことばは緊張すると聞き取りにくくなるが、慣れると殆ど全て理解できる。小・中学校では通常学級や特殊学級で学び、高校に進学したいとの希望を持っていたが、養護学校の高等部へ進み卒業した。現在は作業所に通い、放送大学で科目を履修している。Aさんは運動障害（上・下肢の不随意運動）と言語障害などがあり外見的には障害が重く見られがちだが、内面はとても明るく豊かで、自己主張ができ、自己の身体をモチーフにした童話を創作し、大きな大会で入賞の経験もある。大学で勉強したいと強く希望した理由は、「絵本作家になりたい」という夢を持ち続けていたからである。しかし、養護学校での指導は、Aさんの考とは違っていた。先生はAさんに、「作家になるために沢山絵本を読みなさい」とか「もっと同世代の人と歌やファッションについて話しをしたら」などと勧めてはくれたが、具体的な指導内容は夢の実現とはほど遠い、作業学習や運動・動作に関する学習などが多く展開されていた。Aさんは中学時代に学んだワープロ（一人で電源が入れられるようにスイッチを改良した）の学習を發展させて、パソコンを使って文章を書きたいと思っていた。Aさんが何度も先生に自分の希望を具体的に主張したにも拘わらず、Aさんの希望に添った「授業」が実施されなかった。そのことは筆者にとって理解しがたいことでした。その原因は何だったのか。なぜ、Aさんに学校として、本人や保護者のニーズに対応した「適切な指導」と「必要な支援」を実施できなかったのか分かりません。筆者はこのことを考え続けてきている。

### 2 実態把握は子どもの理解

学校の教育活動は、計画、実践、評価という一連の流れの中で展開される。指導と評価の一体化や評価の方法の工夫・改善を図り、学校としての取り組みが期待されている。前述の教育活動の流れを、評価の観点から示すと、指導の前の診断的評価、指導計画の立案、実践場面における形成的評価、授業後の総括的評価となる。総括的評価は、評価のための評価でなく、次の指導に活かされる評価として位置づけることが重要である。すなわち、一人一人に応じた指導は、個々の子どもに対するアセスメントから開始される。適切なアセスメントに基づき、指導計画を立て、授業実践をし、評価をするという一連の教育活動の「正の循環」が成立する。指導と評価の一体化とは、この正の循環を意味する。

子どもの実態を把握するためのアセスメントの方法には、心理学的な検査による方法、観察による方法、面接による方法などがある。その方法の特徴を踏まえて目的に即した方法を選択する。また、障害や疾病に関する医学的所見や保護者からの情報を収集することも子ども理解の貴重な資料となる。

実態把握の内容として、生育歴、基本的な生活習慣、身体運動機能、視覚や聴覚などの感覚機能、知的発達のレベル、学力、学習上の配慮事項、興味・関心、人や物とのかかわり、コミュニケーションの手段の状態、対人関係や社会性の発達、特別な教育機器や補助具などの必要性、障害の自覚に関すること、さらには家庭や地域の環境などが含まれている。

実態把握に基づいて、授業を展開するが、子どもの状態を全て把握されなければ、授業ができないわけではありません。授業を展開しつつ子どもの情報を収集し、授業にいかしていくような柔軟な姿勢が教員に求められている。実態把握は、障

害の理解だけでは不十分で、目の前にいる子どもに対する理解を深めることが大きな意味を持つ。このことは大変重要なことである。前述のAさんの指導において、子どもへの理解が十分ではなかったと思われる。実態把握は、目の前に存在している生きている子どもの生の情報を捉えることである。子どもに関する知り得た情報を基にした書類上の整理が、実態把握であると勘違いしている教員が多く見られる。授業を通して子どもの情報を収集し、子どもの発達の課題を捉え直し、将来を見通した指導内容を検討することが重要である。これが授業の中で、「生きている子ども」と関わる教育の醍醐味であると考えられる。

### 3 子どもが求めている「楽しい授業」とは

障害のある子どもの授業を進めるとき、子どもが活き活きと活動できるような環境を設定する必要がある。それは学びの主体者である子どもにとって「分かりやすい」ということである。子どもが持っている力を十分に発揮できるように、視覚や聴覚を含む認知的側面から分かりやすい環境を創出することは、障害のある子どもの授業では特に必要である。子どもにとって楽しい授業とは、分かりやすく、学びたい内容であることである。子どもの発達に適した学習内容が用意され、子どもの興味や関心に結びつくように内容の設定がなされていることである。子どもが安心してできる学習内容から始め、発達課題へと発展させていくのである。つまり学習内容が子どもの「最近接領域」として設定されていることが重要で、学習内容が簡単すぎても、難しすぎても楽しい授業にはなりません。子どもの発達課題の精選は、指導課題として授業中に教師とともに「できること」と日常的に子どもが一人で「していること」を区別する必要がある。支援を受けながら「できる」ことが、日常的に「していること」へ繋がるような指導の連続性を意識することが必要である。

この教育の重要なキーワードは、「自立」と「社会参加」である。このような視点が欠けると、Aさんが学校で指導されたような、発達課題に重点

が置かれた指導になり、本人の生活年齢や保護者が考える願いと齟齬が生じることになる。学校だけで子どもの課題を解決する学校完結型の考え方は過去のものである。子どもの視点で子どもが将来に抱く夢を実現することこそ、教育の最も得意とするところである。発達課題に拘りすぎたら子どもの自立や社会参加を難しくする場合が考えられる。2001年にWHOの総会で採択されたICF（国際生活機能分類）の考え方を参考に、個人因子と環境因子の側面及びその相互作用としての人間と環境について検討される必要がある。学校教育と家庭や社会との接点を意識しつつ適切な指導と必要な支援が重要である。学ぶことの楽しさや知ることの喜びが感じられる授業を子どもたちは求めている。子どもが楽しく学習活動に参加し、自分自身の活動の世界を切り拓いていく過程で生ずる子どものやる気は、家庭や社会との繋がり基盤となるであろう。

### 4 子どもの微細な表現を読み取る力

筆者は、授業の中で教員に求められる大切な資質として、子どもの示す表現をいかに読みとることができるとをあげたいと思う。教員が子どもの表現を読み取る力は自然に身につくものではなく、実態把握で示したような内容を基に、子どもと深くかかわることで培われる。障害の重い子どもの場合は、この表現が微弱であったりする。その微弱な表現を読み取るためには教師側のトレーニングが必要である。子どもの表現を見逃さず的確に発見するためのトレーニングの一つとして、学習場面をビデオで記録し、複数の教員で検討を行うことである。ビデオをただ見るだけでは教員間での共通理解はできません。教員によってビデオを見る視点が異なる。教員間の視点の違いが重要である。ケースカンファレンスの機会は教員間の共通理解の場であると同時に、子どもの表現を読み取る専門性を高める場として有効である。

子どもの表現を読み取ることは評価につながる。授業は空想の世界ではなく、正に現実である。現実に行っている子どもの表現を読み取る

り、教員がそれに反応することは、人間にとって最も大切なコミュニケーションである。このコミュニケーション場面を毎日ビデオで撮り、授業を振り返る（reflection）ことは困難である。筆者が勧めたいのは、目の前の子ども活動を記憶するトレーニングを教員が意識的に行ってみることである。教員一人の努力だけでは十分とはいえません。複数の教員でそのトレーニングを続けてみることである。意識的な取組は人を変え、授業が必ず変わる。意図的に努力することをお勧めしたい。

筆者が授業を見るときに心がけていることがある。それは授業の始まる前に指導案に目をとおり、授業を見るときに指導案は手にしません。できるだけ授業の場面を記憶するようにする。授業は子どもにとって大切な時間である。手に書類を持って子どもの前で見るようでは、子どもが緊張し、いつもの状況と異なる結果になるからである。子どもは、環境との相互作用で反応も異なる。子どもの反応を読み取ることは、子どもだけの問題ではなく、その場にいる教員も評価の対象になることに留意すべきである。子ども反応の読み取りを含め評価を適切に行うためには、教員間の連携・協力が必要である。複数の教員の目で、子どもの表現を読み取り、指導にフィードバックすることによって、子どもと教員の関係性が質的に高まる可能性がでてくる。

## 5 運動後に意図的に反応を待つ「間」の取り方とコミュニケーション

実際に肢体不自由養護学校の授業の中で行われたトランポリンを使った活動場面において、子どもの反応の読み取りについて検討してみよう。

ある学校で自立活動の時間に、トランポリンの授業を観る機会があった。教員は、トランポリン上の子どもに対して、やや大きめの揺れとイレギュラーな動きを与えていた。揺れが終わると「楽しかったねー」と言って、子どもをトランポリンから降ろした。「この授業のねらいは何だろう。強めでイレギュラーな動きで示した、子ども反応をどう捉えるのか」を教員に聞いてみた。そ

の時間の目標は「揺れ刺激」でした。トランポリンという遊具の特性を教員は知っているか、子どもの指導のねらいと揺れ刺激の意味は何か、次々と質問事項が浮かんできた、対象の子どもは自力移動が難しい子どもでした。トランポリンでできることは、「運動」と「静止」である。運動することで、静止が分かる。その逆も同じである。この関係が分らないとトランポリンの指導はできません。トランポリンを使った活動で大切なことは、運動を止めた後の子どもの反応が重要である。子どもの反応を確かめる、時間が必要となる。この「間」の取り方がコミュニケーションに繋がる。少なくとも運動を止めた後、30秒は子どもの反応を待つようにしたい。これまで30秒間子どもの反応を待たなかった教員は、残念ながらいなかった。子どもの反応を持つことについては知識として理解はあっても、教員の身体感覚がそれに従えない状況にあると考えている。子どもとのやりとりの中で、「間」の持つ意味を身体で覚えて欲しいと思っている。

教員は子どもの活動を、活動前、活動中、活動後のように細分化して観察する必要がある。教員は揺れの大きさを加減しながら、子どもの表情や四肢や体幹などの身体状況を詳細にチェックする。活動前の子どもの期待感、活動中の揺れに大きさに対応した子どもの反応を観察することによって子どもの連続した表情の反応が読み取れるようになる。子どもは時々、身体の中からわきでるように気持ちを表現することがある。このような子どもの示す内的反応を発見できるよう細心の注意を払うことが大切である。特に障害の重い子どもは、活動を受け入れて、表出するまで時間がかかることがある。子どもの表情等を読み取るために必要な時間を十分に確保することがとても大切である。活動した後の表出される表情等を読みとることは、次の活動へつながる。子どもの活動後の反応を見極めることは、教員との子どもの関係を見直すことにもなる。子どもの反応をしっかり時間をかけて観察することは子どもと教員の関係づくりにおいて大切な時間を共有することになる。

## 6 まとめ

最近、全国的にみて「授業」をテーマに公開研究会が行われるようになってきていることは大変喜ばしいことである。特殊教育から特別支援教育へ大きく変わろうとしている時に、最も大切にすべき、日々の「授業」の充実に向けた研究が展開されることは意義深いことであると思う。本稿では、学校で行われている日々の「授業」の一コマ

を想起しながら、障害のある子どもの教育における授業場面で大切にしたい点をまとめた。授業場面で、子どもが懸命にサインを発信しているにも拘わらず、その場では、気づかれず子どもが落胆している場面に遭遇したことが何度かあり、「子どもの発信に気づいて欲しい」「気づかないでいることは、あまりにももったいない」という筆者の思いをまとめた。授業改善に資することができれば幸いである。